

【論文】

根本的経験論と現象学における関係の实在論

—ジェイムズとフッサール—

齋藤 暢人

0. はじめに

同時代を生きたジェイムズとフッサールは、ともに意識の哲学者であり、両者の哲学は、完全な一致には至らないにせよ、深層において共鳴し響きあうことが知られている。興味深いことに、そうした彼らはいずれも関係の实在論者でもあった。本稿では、とくにこの事実に焦点を当てて両者の思想の含意を探り、それをもとに、関係の存在論の可能性について考えてみたいと思う。

議論は以下のように進む。はじめに、ジェイムズとフッサールの哲学を、関連事項を中心に概観し (1)、そのうえで、ジェイムズの関係論とフッサールの関係論をそれぞれ詳しく検討する (2、3)。両者の説に基づき、関係の存在論の基本性格について考察する (4)。さらに、構造が関係の前提となりうることから、より一般的な関係の存在論の可能性を示し (5)、関係の存在論と現象学的形而上学との結びつきの必然性を論証する (6)。最後に、関係の哲学が意識の哲学への根拠になりうることを補足的に示す (7)。

1. 意識と関係の存在論

ジェイムズとフッサールはいずれも関係が存在するという説を採るが、それぞれの関連する所説を概観して議論の方向性を示しておく。

ジェイムズは、絶対的観念論者であるブラッドリの内的関係説を退ける。

内的関係説とは、関係がすべて内的である、すなわち、すべての関係項が他のすべての関係項へと関係している、というものである。このとき、関係項はそれぞれの独立性を失って溶解し、全体が部分に内在することになって、容易に想像できるように、一元論を帰結する。多元論者であるジェイムズにとって、これは決して受け容れられるものではない。そこで彼は、関係項に変化をもたらさない関係、外的関係を立て、その存在を力説する。この外的関係説は、一般的には多くの関係項をもつ場合を許容し、したがって多元論を帰結する。ジェイムズにとって、内的関係は、知性が弁証法を用いることによって捏造された形而上学的虚構であり、そうした知的操作を排したところに純粹経験がある。それは主客未分の微睡にも似た境位であり、その絶えざる流れの中、諸要素は関係の網の中で纏れあう。関係は純粹経験の本質的な構成要素であり、それなくしては経験そのものになりたちえない。

フッサールは、カントが『純粹理性批判』において提示したような、超越論的統覚による総合の説を否定する。カントにおいては、総合は受容された多様に対する概念の適用を意味する。多様は、総合以前には関係を含まない。したがって、関係は意識から独立したものではなく、むしろ意識の所産である。これに対して、フッサールは、カントが直観されるものとは認めない非感性的な結合の形式や事態などの範疇を、敢えて直観されるもののなかに含める。総合は志向され、充実される対象なのである。関係もまたそうした範疇的なものであり、われわれの意識のはたらきを俟たずして自ずから形成される所与である。

このように概観してみると、ジェイムズもフッサールも、ともに観念論者の説に反対し、概念的作用がはたらく以前に関係が存在する、としている。つまり関係はわれわれの意識に直接与えられるものである。両者は意識の実態に固執し、その動静を克明に追うことで関係の実在論という主張へと辿りついたと言えよう。だが、十九世紀から二十世紀にかけて、こうした強い実在論的主張が有力な哲学者によって揃って主張されたことにはいかなる意義があるのであろうか。この問題は現代においてもなお重要性を失っておら

ず、アクチュアルな課題であり続けている。そうした認識の上に立って、彼らの所説をさらに検討し、その哲学的含意を明らかにしてゆくこととしよう。

2. ジェイムズの関係論

ジェイムズは、『根本的経験論』において、関係の例として次のようなものを挙げている。

(「純粹経験の世界」における例)

with, near, next, like, from, towards, against, because, for, through, my

(「事物とその関係」における例)

is, isn't, then, before, in, on, beside, between, next, like, unlike, as, but

こうした例の多くが、物体の空間、時間的な位置関係を表す前置詞によって表現される概念である。関係は一般的には抽象的なものであるが、具体的なもののあいだの位置関係などは、それ自体が知覚できるような具体的なものである、と言ってもよいであろう。純粹経験を構成するのは、いわば具体的な関係なのである。

このような関係を含む流れとしての純粹経験の記述は、さながら風景描写である。曰く、経験は、まるで形容詞や名詞、前置詞や接続詞が織り込まれているかのような状態で流れてゆく (ERE, ch.3)。また、関係は、純粹経験の流れ、具体的なものの流れ、あるいは感覚的な流れの中から、名詞や形容詞と同じように自然に花咲き出るものである。そして、それらは、私たちがそれらを流れの新しい部分に適用すると、液体のように再びその流れのなかへ溶け込んでゆく (ibid.)。

こうした一連の記述は、流れ去る経験の一瞬の姿に眼を留めるよう、読み手の心に静かに訴えかけてくる。しかしながら、関係とはどういうものかを

掘り下げるものではない。例の中には、「連結詞」とされる is, isn't という注目すべきものがあり、おそらくこれらは少なくとも二つの項を結合し、単なる項の寄せ集めとは異なる、A is B のような何らかの構造をつくり出すのであろうと見当がつく。だが、これらについても詳しい説明はない。要するに、これらの記述は、関係の形而上学的分析というよりも、むしろその現象学的記述である。そこで、フッサールの所説を参照することが興味深いものとなってくる。

3. フッサールの関係論

フッサールの『論理学研究』第六研究では、通常の知覚の対象とされる感性的なものとは異なる、範疇的なものの認識が論じられる。ここにいう範疇的なもののなかには関係も含まれる。彼が挙げる例をみてみよう。

(§40における例)

das, ein, einige, viele, wenige, zwei, ist, nicht, welches, und, oder

(§43における例)

ein, das, und, oder, wenn, so, alles, nichts

これらのなかには明らかに关系的なものが含まれるが、さらに、外的関係として「AがBの右にある」「AはBより大きい」「AはBより明るい」「AはBより高音だ」などを挙げる(6LU, §48)。これらの外的関係は、関係項A、Bとともに事態の構成要素となる。事態は、複数の項の単なる寄せ集めではなく、それらが構造的に結合されたものである。存在は範疇的なものであり、項によって補完されることで事態が構成される(6LU, §44)。するところで先のジェイムズの例を想起するならば、そこで意図されていたのはまさにこの事態だったのではないか、と思われてくる。ジェイムズの純粹経験においても、关系的な is による結合はここでの事態に相当するものを生

み出すのではないか。

だが、フッサールの関係論がおかれている文脈の中で最も重要なのは、関係を含む範疇的なものが非独立的なもの的一种だということであろう。ジェイムズが関係の記述に徹して、関係とはなにかという問題を掘り下げてゆかないのとは対照的に、フッサールは関係の現出を記述しつつ、その形而上学的本性に迫ろうとしているように見える。この非独立性という概念も、ジェイムズが例示する関係の本質をとらえるためには有効であろう。しかし、この概念それ自体が関係と深くかかわっており、それについては以下で改めて詳論する。

このように、事態や非独立性など、フッサールの提出する概念は、同じく意識の直接的様態へと向かおうとするジェイムズの思想を分析するのに、まるであつらえたかのように適切である。

しかしながら、ジェイムズとフッサールのあいだには無視しえない相違もある。一見して気づかれるように、フッサールが挙げる例には具体的な関係も含まれるが、数や量に関する概念のほうが多く (cf. 6LU, §51)、この点でジェイムズとは対照的である。論理学、数学において扱われる関係、いわば抽象的關係は、ジェイムズの純粹経験の哲学から明確に締め出されたわけではないが、中心的主題の座を占めてはいない。実のところ、フッサールにとって、関係の存在論は、その实在論的形而上学の一部門にすぎない。関係は、感性的なものとは対比される範疇的なものの一部であるが、それらの極限に位置するものが普遍である。フッサールは、色、幾何学的対象などの一般者も直観される、とする (6LU, §41, §52)。範疇的なもののイデア的な性格は、この究極的な形而上学的主張を正当化するための橋頭保なのである。

4. 関係の一般的存在論へ

こうしてみると、ジェイムズとフッサールがともに関係を主題としていたことは明らかであるが、しかし、それぞれが異なる角度から問題をみていたこともまた明らかであろう。だが、この両者の微妙な位相差は、われわれが

関係の存在論をより包括的に展開しようとするときには却ってよい材料になる。彼らの説を整理しつつ総合することにより、関係とはいかなるものかについてさらに考えを深めてみよう。

4. 1. 関係の分類

まず、ジェイムズとフッサールが挙げていた例の違いから、関係には具体的関係と抽象的关系という少なくとも二種類がある。関係はそれ自体抽象的なものであるが、そのなかでもより抽象的なものとより具体的なものがある。

具体的な関係の例は空間時間的な関係である。また、関係項が具体的であるか否かによって、関係それ自体の性格も規定される。具体的なもののあいだの関係はそれ自体また具体的であるが、抽象的なもののあいだの関係はやはり抽象的である。典型的な抽象的对象である数や集合、関数などのあいだの関係は抽象的である。

ジェイムズが例示するような関係は具体的なものであり、知覚などの具体的経験を構成する重要な要素であろう。これに対して、フッサールはそうした豊富な事例を示すことはせず、この点ジェイムズに譲るが、しかし感性的知覚を端的な知覚であるとし、範疇的なものの知覚とは区別している。そして、知覚において与えられる性質について、実在的なものの性質は実在的であるとし、実在性がいわば閉包をなしているとする (6LU, §47, 48)。もちろん感性的関係もあり、それは感性の領域で閉じているであろう。

フッサールのこうした考察は重要である。それは次のような問題を考えることで明らかとなる。ここで分類された関係について、具体的関係が感性的で、抽象的关系は悟性的である、と言えるのであろうか。だが、もしそうであるとすれば、後者は所与ではなくなるのであろうか。つまり抽象的关系は心的構成物なのであろうか。

ここで導かれた結論は、ジェイムズ、フッサールの思想とはもちろん相容れないが、関係の実在論とも真っ向から対立する。では、この結論を退ける

根拠をみつけることはできるであろうか。そのような根拠の候補のひとつが、フッサールの範疇的直観の説である。すなわち、感性的なものばかりでなく、範疇的なものがあり、それらへの志向は充実され、したがって直観される(6LU, §40)。そのような範疇的なものは実在するものではない(6LU, §43)。だが、そうした非実在的なものである範疇の起源は、内的知覚ではない(6LU, §44)。それはわれわれの意識が作り出したものではなく、意識によってとらえられたものである。要するに、関係は、非実在的なものというありかたで与えられる範疇的なものの一種である。言いかえると、関係は、存在しないものでありながら心的構成物ではなく、所与である。ここでフッサールが提案していることは、われわれの認識のモデルの改訂である。相対立する感性と悟性の協働によって認識が成立するというモデルに代わり、所与を受容する感性が全体の基礎にあるというモデルを提示するのである。したがって、この範疇的直観の可能性が関係の实在論の論拠となる。

そうであるとすれば、関係の实在論の最終的な根拠は現象学的事実となる。これは循環である、という批判がありうるであろう。現象学的事実は意識を前提としており、したがってそこに帰着されるものは心的構成物である可能性を免れていない、というわけである。だが、現象学的事実を権利上ありうるものとし、心理学的事実から峻別することを許せば(カントとは異なる、現象学的還元による超越論的主観性の可能性を認めるならば)、その内容は心的構成物ではない、と答えることができるであろう。

4. 2. 関係の形式

ジェイムズが挙げた諸関係は、その内容からみると雑多であるが、その形式においては整然と一致している。with (), my (), () is () のようなそれらは、いずれも単独では用いられず、補足を必要とする。このような語句ないし概念の存在は古くから知られており、共範疇的と呼び習わされてきたが、フッサールは、『論理学研究』第四研究において、これらを非独立的意味である、とした。

ジェイムズの挙げたさまざまな関係をフッサールの非独立性という概念に包摂することは、形式上は問題ないであろう。しかし、このように列挙された具体的事例の数々は、非独立性とはいかなることか、という根本的な問題を惹起することになるかもしれない。というのも、こうした事例は、非独立的なものの一般的・本質的な形態とは、それらをすべて包摂する関係的なものなのではないか、という考えに導くからである。ジェイムズの例は、非独立的なものは一般に関係的なものとみるべきなのではないか、と思わせる。この考えの射程は意外に長く、それゆえその検証は次節でおこなうこととし、ここでは、関係を非独立的なものとみることで明らかになることについて考える。

この非独立性の概念は便利ではあるものの、それをどのようなものとしてとらえるかによっては問題が生じる可能性がある。問題とは、関係が非独立的で、その項に依存するのならば、関係は内的関係になってしまうのではないか、というものである。言うまでもなく、もしそうであるとすれば、関係はその項へと還元ないし消去される恐れが生じる。

この問題に対しては次のように答えなければならないであろう。関係と項の依存関係はきわめて弱いものでありうるのではないか。どの程度弱いのであろうか。まず、関係が条件を満たした項に必ず付随するわけではなく、付随しないことがありうるであろう。また、関係は条件を満たさない項に付随することもありうるであろう。つまり、項と関係の結びつきは全く偶然的でありうるのである。

関係とその項とはこのように離れているのであるから、極端な場合には、項をもたない純粋な関係というものもありうるであろう。関係の実在論者は、本質的に補足を必要とするものではあっても、補足するものなしにそれ自体をとらえることが可能であるようなものの存在を認めるのではないか。

ところで、ここでもうひとつの問題がある。それは、関係の知覚とはなにか、というものである。関係の知覚を、関係項と関係の知覚であるというわけにはゆかない。たとえば、 Rab という関係を知覚することを、 R 、 a 、 b と

いう項の単なる系列を知覚することだとみるわけにはゆかないのである。というのも、このときには、存在する個々の要素がそのまま認識に写し取られていることになり、典型的な素朴実在論ないし模写説になるからである。

ではあるが、知覚の内容がこのような項からなる関係であることは動かせない。では、関係の知覚をわれわれはどのように説明すればよいのであろうか。

フッサールの出した答えは次のようなものである (6LU, § 48)。われわれの知覚には階層がある。感性的知覚は端的なものであり、独立的であるが、それに対して、範疇的直観はそうした感性的知覚などに依存する非独立的なものである。両者の関係は基づけ関係によって規定でき、前者は基づける作用であり、後者は基づけられる作用である。関係を項のひとつとしてみたときには、その非独立性という特徴が脱落してしまうが、それをとらえる作用には非独立性という特徴が残留しているのである。

5. 関係と構造

かくして、ジェイムズとフッサールの所論を総合し、関係の一般論のための考察をいくらか展開することができた。だが、フッサールの範疇的直観の例のなかには、関係についての所見をさらに一般化することを可能とするような興味深いものが含まれている。これについてさらに考えてみたい。

フッサールは、形容詞の語尾変化に範疇的なものが現れている、とし、白 weiß でなく、白いもの weißes として認識する、という例を挙げる (6LU, § 40)。このような形容詞の語尾変化は、われわれが一般に関係と聞いて思い浮かべるものとは異質である。だが、実は、こうした例もまた関係と深く結びついているように思われる。

屈折語における語尾の変化、つまり曲用や活用は、いわゆるパラダイムに従って行われる。それは、身近なところでは教科書に掲載された変化表などとして実現されるものであるが、しかし、それはあくまでも普遍的な構造を具現化したものであり、差異の体系としての言語・記号体系を構成する要素

のひとつであると考えねばならない。むしろパラダイムは体系の一断面であるとみるべきかもしれない。そうであるかぎり、パラダイムは関係を前提した構造である。というのも、パラダイムは、それぞれが文法的範疇である集合の直積とみなされうるからである。

こうした見解を踏まえると、フッサールが論じているのは、次のようなことなのではないか。つまり、ある文法的変化の結果、すなわちある種の変換の像は、それ以外の変化の可能性という広大な背景を必然的に伴うのである。あるときに書かれるか発話されるかした語が *weißes* であれば、それは同時に *weißer* でも *weiße* でもないこと、他の変化形を排除することを自動的に含意する。文法的変化は、そうではない候補との差異を示唆し、それによって同時に関係的構造をも暗示するのである。

このような関係を構造としてとらえる見方に比べると、ジェイムズの関係観はやや素朴にみえるが、これには意図的なところもある。彼はとりわけ連接的關係を重視するからである。離接的關係は消極的關係として、關係の欠如とも解されかねない。それゆえ離接的關係のみでは關係が否認される可能性を排除できない。そこで積極的な關係を存在するものとして認め、孤立した対象であっても關係づけられるとし、敢えてモザイク哲学を標榜するのである (ERE, ch.2)。

だが、もしそうであれば、ジェイムズの議論のなかには、このようなより抽象的な構造が、たとえ明示されてはいなくとも、可能性として胚胎している、ということはないのであろうか。フッサールの例のように、ある抽象的な要素を、高次元の抽象的構造の断面とみることはできないであろうか。

先の例を注意深く見ると、ジェイムズが挙げた *my* は、実は他の例とやや異なっており、それが何故に關係的なものなのか、注釈が必要であるように感じる。*my* が關係を表す語句の例として登場するのはなぜであろうか。ことによると、それは私とその所有物のあいだの關係を表しているのかもしれない。しかし、他方でこれは *I-my-me* という系列の一環であると考え、それは *I* や *me* でなく、また *your* や *his*, *her* でもないというように、他の

項を排除する機能をもっており、そこではフッサールの例の場合と同様、関係が前提されているのではないであろうか。

また、ジェイムズの of の例は、実は文法的な格を表示している場合があり、そのような文脈の下では、形容詞の語尾変化と同じ機能をもちうるであろう。前置詞のほうが見かけ上単純な構文をもっているが、機能の面では同等の複雑な関係を表すこともありうるであろう。

一般に、こうした語句がどのような意味をもつかは、文法的パラダイムを支える関係によって定まるのであり、そこから関係を排除することはできない。非独立的なものは、それが明示的に関係的な構造をもっている場合でなくとも (Rxy などの形をしていなくとも)、関係を前提しうるのである。それゆえ関係は普遍的なものとして潜在しており、存在論において中心に位置すべきなのは、実は実体ではなく関係なのではないか、とも思われてくるのである。

6. 意識と記号

われわれはこれまで、ジェイムズとフッサールに共通の主題としての関係の存在論について考察してきたが、これまでのいきさつを振り返ってみると、両者の哲学は相互に補完しあう関係にあるように見える。だが、両者の哲学のすり合わせ、ないし融合は、ジェイムズの純粹経験論の帰結である中立一元論にいくらか影響するように思われる。この問題について考えてみたいⁱ。

ジェイムズの中立一元論は直接実在論である。われわれは、対象に意味などの媒体を介して接近したりはしない。対象は存在しているものであり、そのままにわれわれに与えられている。この中立一元論のひとつの系として、ジェイムズは自己超越性を否定する (ERE, ch.3, III)。観念論者は、知るものと知られるものとのあいだには深淵が広がっており、知るものはこれを何らかのしかたで飛び越える、と主張するが、ジェイムズにとってこれは背理である。この結論は、経験が連接的關係によって結びつけられうるという外

の関係説によって回避される。つまり、経験の表象的・記号的性格は認めないが、関係によって経験の一体性は認められるのである。

フッサールの立場は、ジェイムズ流の直接实在論とはやや開きがある。フッサールは、論理学の基礎理論としての記号論研究に取り組んでおり、その成果は初期哲学全体に影響している。『論理学研究』には記号論研究の一面があるⁱⁱ。したがって、そこでの体験の分析の土台には、記号現象の分析がある。記号現象の分析を通じて意味のイデア的契機が取り出されるのであり、それを応用するかたちで体験の一般構造が分析される。

フッサールの体験の分析についてもう少し詳しく述べておこう。『論理学研究』第一研究では、記号が指標と表現に分けられた (1LU, §1)。

記号 { 表現
 { 指標

指標という記号は、その指示対象の存在を動機づける (1LU, §2)。それに対して、表現にはそのような動機づけがもはや欠けているが、しかしそうであっても意味をもちうる (1LU, §5, §8)。意味は志向と充実の二つの次元をもち、充実という次元がなくなっても志向は残るのである (1LU, §9)。

他方、第五研究では意識体験が分析され、記号の意味とイデア的に一致するその志向的本質が抽出される (5LU, §21)。続く第六研究において、さらに代表象による統握が考慮に入れられ、その際、この記号の分類があてはめられる (6LU, §26)。

代表象 { 表意的 (記号的)
 { 直観的

この区分は、体験の充実が偶然的・外的なそれと内的なそれに区別されることからの帰結である (6LU, §14)。こうして、体験のなかに、拡張された記号論的図式が見いだされてゆくのである。

このような理論的考察の根底にあるのが、異なる意識作用が同一の対象をもちうるというフッサールの確信である。所与の多様とコントラストをなす対象の同一性が意識の至るところで見いだされる。しかもそれは物自体のそれではなく、対象そのものなのである。この点において、フッサールは直接実在論者と一致するかもしれない。だが、この一点のみを以て両者の立場を単純に同一視することはできないであろう。知覚それ自体は意味をもっており、したがってそれ自身で完結したものではなく、何かを志向するものでなければならない。

こうして、ジェイムズとフッサールの立場の違いがどこにあるのかが明確になった。ジェイムズは体験の自己超越性を否定するが、フッサールはこれを認容する。だが、ここまで考えてくると、ジェイムズの理論にはある問題が影を落としてくる。それは、関係はどこにあるのか、というものである。

自己超越性をもたない経験を結合する関係があるのは、経験の内であるか、あるいは外であるかのいずれかであろう。では、それが経験の内にあるとしよう。だが、そうであるとすると、関係は関係項となる経験のなかに含まれてしまう。このような関係は内的関係になるのではないであろうか。では、関係は経験の外にあるのであろうか。だが、このときには、経験は、それ自体の外部にある関係項へと向かうことになり、関係を介して自己超越することになるのではないか。もちろんジェイムズはこうした追及に代用の説によって応戦するであろう (ERE, ch.2, IV)。だが、主観的経験には適用できないというこの説の限界はジェイムズ自身が認めるところである (ibid.)。このように、関係の置き所はわれわれを困惑させる問題なのである。

この困難を切り抜けるためにできることはいくつかありうるであろう。だが、関係は外的であるということを守るのであれば、自己超越の峻拒という条件を緩和するのが自然である。これまでの議論から、ジェイムズ哲学のなかではそれは不可能に思われるかもしれないが、フッサールの視点から事態を見直すと、可能性はないわけではない。経験は非独立的なものであり、相互に関係しているのであって、自己超越はそうした関係のひとつの切

り口にすぎない、と考えることができるのではないか。前節の議論から、非独立的なものは関係を前提している。このように考えるならば、経験の相互関係としての自己超越を記号作用とみなす必要はなく、他の要素と関係することになる。

これはジェイズの立場から見れば、フッサールの主張へのいくらかの譲歩にはなるであろうが、しかし、ジェイズが批判するような絶対主義者、観念論者の自己超越のような事態に陥ることまでも意味するであろうか。経験が自己超越的な性格をもっていたとしても、関係もまた存立するのである。そうであるならば、関係項のあいだに超越があったとしても、それは死の跳躍ではないのではないか。このような選択は自己完結でない性格を経験にもたせることになり、純粋経験における世界の流動がいかにして生じるのかの説明をいくらか容易にするであろう。

このように、ジェイズ哲学を現象学の立場からとらえなおすことには、前者の問題を補綴するという多大な利点がある。他方で現象学の側にも、純粋経験の具体的叙述から議論の材料を得るという、これも大きな恩恵がある。

したがって、関係の实在論を主張するのであれば、現象学的に解釈された中立一元論の立場を採るのが自然であるように思われる。これは、既述のように、純粋経験論の側からみると若干の修正であるが、現象学の立場からすると、与件の純度を高めることになり、その点で一層形而上学に接近することとなり、こちらも理論的な修正になる。ともあれ、非独立的なものの経験可能性に基づく存在論が、相互のすり合わせによって可能となるのではないか。

7. 関係から意識へ

最後に、現代の形而上学において提起されている関係をめぐる一問題が、ジェイズやフッサールの哲学と無縁ではなく、したがって、彼らの関係の存在論はアクチュアルな問題でもあるということをも補足的に述べておく。

ジェイムズとブラッドリのあいだで、関係が内的であるか否かをめぐる論争があったことはすでに本稿の冒頭で触れた。その論争の内実はいくつかの論点を含み、案外複雑なものであるが、そこに含まれている次のような問題に注目してみよう (ERE, ch.3, IV)。

いま「本がテーブルの上にある」という文を取り上げよう。これは個体としての本、テーブルについての文である。それゆえ Rab という論理形式をもつ (この本を「a」、このテーブルを「b」、()が()の上にある、という関係を「R」とする)。

ブラッドリはここで、なぜ Rba ではないのか、という問いを発する。与えられているのは項としての R と a と b である。これを組み合わせるのであれば、Rba という事態も可能ではないか。

ここで、Rab であって Rba でないということを説明するために、関係 R が a と b に対してある順序をなすことを強いている、と答えるでしょう。

これは、関係は関係項に影響するのでなければならない、ということの意味する。だが、この異論を認めると、全体としての事実が部分としての関係項に内在することになるのではないか。これは、関係が内的であるということを経結するであろう。かくしてブラッドリは、この関係論をもとに関係それ自体を否定し、絶対的観念論を採る。

もちろんジェイムズはこれを否定する論陣を張る。われわれは事実を外から眺めることができるから、直接に事態を受け容れることができる。本がテーブルの上にあるのであって、間違ってもテーブルが本の上にあるのではない、という事実を受け容れるのである。

フッサールは、既述のように、事態という、文に対応するものを措定した。これは、ここでジェイムズの言う事実に対応する。フッサールは「A は α である」と「 α は A に含まれる」という例を挙げるが (6LU, § 48)、とりわけ好む例は文 $a < b$ と文 $b > a$ の違いである (1LU, § 12)ⁱⁱⁱ。事態は文の対応物であるから、異なる文にはそれぞれ異なる事態が対応づけられることになる。だが、これらの文は明らかに同じことを意味している。その同じこ

ともまた存在するのだとすれば、それはまた事態とは異なる何ものか、ということになる。このようなものをフッサールは状況（事況）という。

さて、問題が生じるのはここである。異なる二つの文が同義であるとき、それらにともに対応するもの（上述の状況）とは、いったい何であろうか。それは、 $a < b$ とも $b > a$ とも書けないなにかである。 $a < b$ と書けば $b > a$ ではなくなり、逆もまた真である。状況は、定義上、いずれのしかたでも表記できないものである。述語を取り換えるとき、問題となるのは主語の順序である。主語の順序はもとの文によって表記されているとおりに固定されているので、両者に共通する順序というものは存在しないのである。

ファインはこのようなものを中立的関係と呼んでいる^{iv}。中立的関係が問題となるのは、数学の文にかぎらず、身近な関係文の場合もありうる。源義経は静御前を愛している。これをLmsと書くことにする。また、静御前は源義経に愛されている。これをL'smと書くことにする（xはyを愛する、を「Lxy」、xはyに愛される、を「L'xy」、源義経を「m」、静御前を「s」とする）。LmsとL'smは異なる事柄であるが、同じことを表している。では、どのようなことであろうか。フッサールのいう状況のごときものがこうした関係の基礎にあるのだとすれば、それは主語のあいだに順序がつかないようなものである。これを中立的関係という。

この問題の要点は、同じものが矛盾する規定を受ける、ということである。もちろんこの問題については、分析哲学の文脈において議論が深められている^v。だが、本節の初めに記したように、この問題はいわば古くて新しい問題であり、ジェイムズやフッサールの思想と全く無縁ではない。そこで、敢えて彼らの議論からの答えを考えてみることにいっくらかの価値はあるであろう。

ジェイムズやフッサールの眼から見ると、ファインが最終的に認めるような中立的関係は、概念的・知的には区別されるが、感性的には区別されないもの、と言えるのではないか。つまり、直観的にとらえられるなものかである。感性的な次元、単なる所与の次元では、それは複数の解釈に対して開

かれている。中立一元論においては、そのようなものの存在は自明であろうが、現象学においてもそれは可能ではないかと思われる。

このような中立的なものを認めるということが、純粹経験論や現象学のような意識の哲学の立場を擁護するかもしれない、という帰結は重要である。純粹に論理的な問題から出発した考察が、言語以前の事実に関する主張へと帰着することになるのかもしれない。

8. おわりに

議論を振り返ると、ジェイムズの思想とフッサールの思想は相互補完的であったが、それぞれの主張を摺り合わせると、カントの哲学などにみられるような、関係の反实在論とは鮮明に異なる関係の实在論が導かれた。関係はより抽象的な構造へと一般化可能であり、この観点から存在論の基本性格を再考する可能性も示された。その当否は慎重に判断されねばならないが、議論の結果からみて、関係の存在を主張することが近代哲学の枠組みを相対化するための足掛かりとなりうる、ということは言えると思う。もちろんそれはジェイムズ本人がすでに自覚的に主張していたことではあったのだが、本稿の結論は、そうした近代批判が孤立した事象ではなかった可能性を示している。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP20K0015 の助成を受けたものである。

〔注〕

- ⁱ 中立一元論については Banks (2014) が参考になる。
- ⁱⁱ 本節におけるフッサール『論理学研究』の解釈は田島 (1988) に負う。
- ⁱⁱⁱ 晩年の『経験と判断』でもこの例を持ち出している。
- ^{iv} Fine (2000).
- ^v Cf. Marmodoro *et al.* (2016).

文 献

[非邦語]

- Banks, E. C., 2014, *The Realistic Empiricism of Mach, James, and Russell: Neutral Monism Reconceived*, Cambridge: Cambridge U. P.
- Fine, K., 2000, 'Neutral Relations', *Philosophical Review* 109, 1-33
- Husserl, E., 1992, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, I, II, (Gesammelte Schriften 3, 4)* Hamburg: Felix Meiner (立松他訳『論理学研究』2～4, みすず書房) (略号 LU)
- James, W., 1996, *Essays in Radical Empiricism*, Lincoln (NE): Nebraska U. P. (榎田, 加藤訳『根本的経験論』, 白水社) (略号 ERE)
- Marmodoro, A., & D. Yates (eds.), 2016, *The Metaphysics of Relations*, Oxford: Oxford U. P.

[邦語]

- 田島節夫, 1988, 『現象学と記号論』, 世界書院

Realism of Relations in Radical Empiricism and Phenomenology: James and Husserl

SAITO Nobuto

ABSTRACT

James and Husserl, who lived at the same era, are both philosophers of consciousness, and it is known that their philosophies resonate in some deep levels, if not completely in agreement. What attracts our interests is the fact that they were both realists in relations. In this paper, I would like to focus on this theme, explore the metaphysical implications of both thoughts, and consider the possibility of ontology of relations based on it.

The discussion proceeds as follows. First, we will give an overview of James's and Husserl's philosophy, focusing on relevant matters (1), and then examine James's and Husserl's theories of relations in detail (2, 3). Based on both theories, we consider the basic character of the ontology of relations (4). Furthermore, since structures can be the premise of relations, we show the possibility of the more general ontology of relations (5) and demonstrate the necessity of the connection between the ontology of relations and the phenomenological metaphysics (6). Finally, we supplementally show that the philosophy of relations can be the basis for the philosophy of consciousness (7).